

1600

吉川幸次郎

隨筆集

學事詩事

・ 筑摩書房

隨筆集 學事詩事



昭和三十五年九月十日發行

定価 三八〇円

著者 吉川幸次郎

発行者 古田 晁

印刷者 勝畑 四郎

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八

筑摩書房

電話東京(291)七六五一

振替東京一六五七六八

印刷 株式会社三省堂
製本 株式会社高陽堂

目

次

I

進歩の一形式——宋以後の中國の進歩について——	四
エロスの東西	八
忘れえぬ書物——禮記について——	一三
學者のいましめ——王肅について——	一六
潔癖——邴原について——	二〇
唐詩の精神	三
燃燒と持續——六朝詩と唐詩——	三四
貧交行	三六
宋詩の場合	四〇
詩人と藥屋——黃庭堅について——	四三
人間の尊重——王安石について——	七〇

田漢の「關漢卿」……………七

絶望の虚妄なる……………六

II

中國詩と日本人……………三

「楊貴妃」と「長恨歌」……………七

古義堂——伊藤仁齋についての一——……………九〇

古義堂文庫——伊藤仁齋についての二——……………九三

鈴木虎雄先生……………一〇〇

日本の中國文學研究……………一〇三

一つの提議——日本覆刻漢籍の圖書館について——……………一二四

III

三つの中國文學史……………一二〇

松本雅明氏「詩經諸篇の成立に關する研究」書評	三九
「圖說世界文化史大系 中國 I」書評	四三
片山哲氏「白樂天」	四四
學事詩事	四七
「唐詩翻譯」について山形直氏に	四八

IV

文の原義——「文化の目」に寄せて——	四八
政治と學問	六六
古典と現代	七三
人間への信賴	七五
皇太子と皇太子妃に	八一
日本よよい子になるな	八七

ギリシヤ的と中國的——ラジオとテレビ——	一九〇
テレビのために	一九四

V

花にふれるもの	二〇一
観	二〇七
小鹽力氏を悼む	二二二

VI

虚室生白	二二八
琉璃廠後記	二三三
田中記	二三八
祇園祭	二三三
あるこみち	二三四

三月のことば……………二七

十月のことば……………三九

VII

購書懷舊絕句……………二四三

南京懷舊絕句……………二四五

春星忌七絕……………二五三

宇治橋銘自釋……………二五

天理圖書館觀書之歌……………二六一

讀畫絕句十五首——私と中國畫……………二七三

歌舞團絕句——大阪藝術祭參加公演をみて……………二六七

學
事
詩
事

進歩の一形式

——宋以後の中國の進歩について——

似た現象は、どの地域の歴史にも必ず何ほどかあるであろうが、中國の歴史は、しばしば停滞の時期をもつたと、批評されて來た。ことに今世紀の大改革に至るまでの千年ほどの時期は、もっとも長い停滞の時期であつたと、批評される。

そのようにいえる面は、たしかにある。私の専門である中國文學の歴史についていえば、詩の文學は、八世紀の唐の時代に、杜甫その他の大詩人が出て、黄金時代をきずいて以後、あまりはなばなしい發展はない。杜甫以後の千何百年かの間、杜甫をしのぐ詩人は、出なかつたばかりでなく、すこし誇張していえば、杜甫以後の詩人たちは、杜甫を詩の神とし、杜甫に模擬し追隨することを、むしろ任務としたといえそうである。あるいはより少ない誇張としては、杜甫その他數人の唐の詩人たちに、模擬、追隨したといつてもよい。表現の方法に小きざみの

變化はあつても、題材は大たい杜甫がすでに歌つたものを、千何百年かの間、くりかえしくりかえし千篇一律に歌いつづけて來たように見える。

そのため中國文學の歴史は、唐以後、詩の世界ではもはや進歩をとどめ、進歩は、詩以外の文學形式がつぎつぎに新しく生まれたことにあり、とするのが、近ごろ大むねの文學史家の見解である。具體的にいえば、十世紀の宋には、新しい韻文形式「詞」が生まれ、十三世紀以降、元と明には戯曲と小説が生まれたこと、そこにこそ進歩があるとするのである。

おなじことは哲學史についてもいえるのであつて、ちょうど一二〇〇年になくなった宋の朱子が、新しい儒學の體系を完成して以後、今世紀の改革に至るまで、朱子の範圍を完全にとびこえる思索はまれであつた。

しかし私は、かく停滯と評せられる歴史のなかに、學者は見落しがちであるけれども、實は見落してはならない重要な事がらが、一つ含まれていると考える。それは文學の制作なり、哲學の思索に、参加する人人の數が、一時代は一時代と、おびただしくふえて行つたことである。

たとえば詩の文學についていえば、唐はたしかに詩の黄金時代であつた。しかし唐の詩は、李白、杜甫をはじめ、もっぱら官吏もしくは官吏に準ずる人人によつてのみ作られている。市民が詩を作つたという記録はなく、また事實もまれであつたであらう。ところが次の宋の時代

の詩は、唐の詩ほどの生彩はもたず、詩の停滯はこの時期にはじまるとされるのであるが、その宋の時代の詩は、官吏ばかりでなく、市民によつても盛んに作られている。宋の末年の「江湖詩派」の領袖である陳起は、出版屋の主人であつた。以後、元、明、清と時代のうつるにつれ、市民の詩文學の制作への参加、また哲學への参加、うち後者の場合は、たとえ積極的な思索者としての参加はまれでも、消極的な受容者としての参加は、時代とともにふえている。それについての資料の整備は、社會史、經濟史の學者の努力に期待すべきであり、私も文學史家の手におえぬものがあるが、しかしなお、手近な資料として、朱子の儒學に對する更なる革新であつた明の王陽明の學說が、市民の間に多くの信奉者をもつたこと、清の新學派である考證學が、商人の家から多くの學者を出したことなどが、指摘される。

ところでかく文化への参加者がしだいにふえたということは、やはり進歩であつたのではないか。少なくとも進歩の過程であつたのではないか。そうして多くの参加者を吸収するためには、文化の規格を急激に変更しないこと、つまり詩は杜甫、哲學は朱子と、規格がきまつてゐること、それは退屈を生み弊害を生み、ある學者からは停滯と批評される形態であるが、それがむしろ必要であつたのではないか。

またそれを進歩の一形式と考えるのをきつかけとして、事がらを見直すと、宋以後の詩は、

7 進歩の一形式

一見、千篇一律に退屈であるけれども、退屈さはその薄い表皮であり、表皮をめくって見ると、多くの市民を作者にふくむそれらの詩は、時代の進むにつれて、だんだんこまかい新しい心情を歌っている。何人かを讀みくらべると退屈であるが、一つ一つは退屈でない。少なくともたとえば、貴族に獨占された平安朝の歌が、ただの停滯となり、ただの退屈となつて行つたのとはちがつている。

そうしてまたこのいわゆる停滯の間に、文化が横にひろく市民の間に浸透したことが、文化は少數者のものでなく人人のものであるという自信をつちかい、文化に厚みを與えたと觀察される。ただいまの中國の改革は、みずからの過去への反撥であるとともに、過去が生んだ厚みの上にも立つて、行われていると感ずる。

われわれ日本のいわゆる文化人は、主張がよく國民に浸透しないうちに、つぎつぎと新しいものに飛びうつる傾向なしとしない。その結果、平安朝末期の歌のようなことにならないように、われひとともに心がけたい。

エロスの東西

アリストファネスともアリストパネスとも書かれるギリシャの喜劇作者の芝居、ことには「女の平和」の類は、中國文學になれた私を、驚倒させる。芝居そのもののよしあしではない。エロスにふれる言葉が、紀元前のこの文獻に、えんりよなくふんだんに、とびだすことである。

アリストファネスないしはアリストパネスが「女の平和」を書いたのは、紀元前四一二年であると、高津春繁さんの翻譯の解説にいう。しかれば、中國では、東周戰國時代とうしゅうせんごくのはじめであり、孔子が死んでから五十八年めである。論語の編集は、そのころすではじまっていたかも知れない。また今日われわれが讀む中國古代の文獻のうち、詩經、書經、易經は、今日われわれが見るとおりの形でなくとも、それに近いものがすでに存在したであらう。また歴史叙述